

令和6年1月3日

南の風新春特集号Ⅱ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号の続きです。

その差はだれにも埋め合わせてもらえません。格差が開いてしまったあとから「自分がこうなったのは、誰も厳しく教えてくれなかったせいだ」などと申し立てることなどもちろんできません。自分でちゃんとしなかったせいでしょ？ とあっさり切り捨てられることもままあります。

「厳しい大人」というのは、若者を「一定ラインまで引き上げる」ことを責任もって保証してくれる人でもありました。その指導やフィードバックが厳しくても辛くてもしんどくても、取りあえず信じてついていけば、ある程度の高みまでは自分を運んでくれる、そういう指導責任を頼もしく引き受けてくれる人でもありました。

今の時代は、そういう「厳しい大人」という存在を、子どもたちにとって加害的であったり、抑圧したりすることで、心の傷を負う原因となってしまいうリスクがあるということで排除してきました。それによって、確かに子ども時代に理不尽やトラウマを味わう機会がめっぽう減ったことは間違いないが、かつてそういう人達によって保証されていた「高み」に上がって来れるかどうかは、完全に「**自己責任**」になってしまいました。

自分で自分を厳しく管理して、「高み」にまで自分を押し上げられる若者はそう多くはいません。結果として世の中は「**二極化**」が著しくなっています。「勝ち組」はライバルが減った分だけその取り分が大きくなったが、「負け組」になると—— 負け組になってしまったのは、自分の自主性の結果なので——救済の論理はなく、あっさり「自己責任」として突き放されます。

そもそも教える側にはほとんどメリットはないのに、教える相手の尊厳や心理的安全性まで慮って、まるで「お客様」のように遇しなければならぬというのは、こういってはなんだが、さすがに面倒くさい気がします。そんなことに付き合ってくれる人はそれほど多くいません。多くの同僚や上司は、そんな「配慮が必要な人」に対しては根気強くフィードバックなどせず、早々に見限ってしまうのではないのでしょうか。

「大切なお客様」として接してくれないと拗ねてしまうような若者には、あえて成長を促す指導などするのは「コスパが悪い」と言うことで、心が折れない程度のコミュニケーションに止め、また本人にも過度なプレッシャーにならないくらいの（最悪いきなり心が折れたり、音信不通になったりしても困らないくらい重要性が低い）仕事をあてがうくらいが合理的だと判断されるようになります。そうこうしているうちに、自分で自分を厳しく律して行動する人とのスキルや成果の格差はどんどん開いていくことになります。しかも「**自律的にやる人との格差が開いてますよ**」と教えてくれる人すらいません。

————— 無責任だからやさしくなれる —————

「厳しい大人」がいなくなった今の世の中では、「やさしい大人」には事欠かないようです。

それは「直接の監督責任を負わなくて済むからこそそのやさしさ」であるのではないのでしょうか。いくなれば無責任に由来するやさしさです。 次号にします。